

1 人生に効く古典文学（四）魔法の言葉『和歌』の力

2 ●今日の「人生に効く」処方箋

4 《三大和歌集》

5 ■万葉集 奈良時代

6 特徴：現存する日本最古の歌集（約4500首）

8 ■古今和歌集 平安時代

9 特徴：日本最初の勅撰和歌集（約1100首）

10 醍醐天皇の命令で紀貫之らが編集

12 ■新古今和歌集 鎌倉時代

13 特徴：勅撰和歌集（約2000首）

14 後鳥羽上皇の命令で藤原定家らが編集

16 『古今和歌集』仮名序より

17 やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。

18 世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひ出いだせるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、
20 いづれか歌をよまざりける。

21 力をも入れずして、

22 天地を動かし、

23 目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、

24 男女の仲をもやはらげ、

25 たけき武士の心をもなぐさむるは歌なり。

26 この歌、天地の開け始まりける時より出で来にけり。（後略）

27 ※世阿弥「花は心、種は態（わざ）なるべし」

1 参考)『毛詩(詩経)』大序より

2 詩者、志之所之也。 詩は志の之く所なり。

3 在心為志、發言為詩。 心に在るを志と為し、言に發するを詩と為す。

4 情動於中而形於言、 情中に動きて、言に形わる。

5 言之不足、故嗟嘆之。 之を言いて足らず、故に之を嗟歎す。

6 嗟嘆之不足、故永歌之。 之を嗟歎して足らず、故に之を永歌す。

7 永歌之不足、 之を永歌して足らず、

8 不知手之舞之、足之蹈之也。 知らず手の之を舞い、足の之を蹈む。

9

10 参考)「創世記」(旧約聖書)より

11 霊(息、風) 神 漂う 上
12 ヴェ・ ルアフ エロヒイム メラヘフエツト アルペネー ハ・マイム
13
14 光
15 ヴア・ ヨメール エロヒイム イエヒー オール

16 ※神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」
17

18 参考)『声字実相義』(空海)より

19 内外の風気わづかに發すれば必ず響くを名づけて声という。

20 響きは必ず声による。

21 声はすなわち響の本なり。

22 声發して虚からず、必ず物の名を表するを号して字という。

23 名は必ず体を招く。これを実相と名づく。
24

25 『古事記』の歌

26 故是を以ち其の速湏佐之男命、宮を造作るべき地を出雲国に求ぎたまふ。尔して湏賀の地に
27 到り坐して詔りたまはく、「吾此地に来、我が御心すがすがし」とのりたまひて、其地に宮を
28 作り坐す。故其地は今に湏賀と云ふ。この大神、初め湏賀の宮を作らしし時に、其地より雲
29 立ち騰る。尔して御歌作りたまふ。其の歌に曰く、

30 八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を

1 「あなにやし えをとこを」 「あなにやし えをとめを」

2 三大歌集時代の比較「黒髪」

5 奈良…朝寝髪われは梳らじ愛しき君が手枕触れてしものを（作者不詳）

7 平安…黒髪の乱れも知らずうち臥せばまづかきやりし人ぞ恋しき（和泉式部）

9 鎌倉…かきやりしその黒髪の筋ごとくにうち伏すほどは面影ぞ立つ（藤原定家）

11 参考）与謝野晶子・俵万智

12 その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな（晶子）

13 二十歳とはロングヘアーをなびかせて畏れを知らぬ春のヴィーナス（万智）

14 みなどこにけぶる黒髪ぬしや誰れ緋鯉のせなに梅の花ちる（晶子）

15 水底にけぶる黒髪の美女は誰？ 緋鯉の背中に散る梅の花（万智）

17 『万葉集』名歌

18 東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ（柿本人麻呂）

19 憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も我を待つらむそ（山上憶良）

20 あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（額田王）

21 熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（額田王）

22 君が行く道の長手を繰り畳ね焼き滅ぼさむ天の火もがも（狭野茅上娘子…さのちがみのをとめ）

23 夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ（大伴坂上郎女）

24 百伝ふ磐余（いわれ）の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ（大津皇子）

25 家にあれば筥（け）に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る（有間皇子）

26 父母が頭かき撫で幸（さ）くあれて言ひし言葉（けとば）ぜ忘れかねつる

27
28

1 石見相聞歌 柿本人麻呂

2 柿本朝臣人麻呂、石見国より妻に別れて上り来し時の歌二首ならびに短歌より

3 石見（いはみ）の海 角の浦廻（うらみ）を

4 浦なしと 人こそ見らめ

5 潟なしと 人こそ見らめ

6 よしゑやし 浦はなくとも

7 よしゑやし 潟はなくとも

8 鯨魚（いさな）取り 海辺を指して

9 和多津（にきたづ）の 荒磯（ありそ）の上に

10 か青なる 玉藻沖つ藻

11 朝羽振る 風こそ寄らめ

12 夕羽（ゆふは）振る 波こそ来寄れ

13 波の共（むた） か寄りかく寄る

14 玉藻なす 寄り寝し妹を

15 露霜の 置きてし来れば

16 この道の 八十隈（やそくま）ごとに

17 万（よろづ）たび かへり見すれど

18 いや遠に 里は離（さか）りぬ

19 いや高に 山も越え来ぬ

20 夏草の 思ひ萎えて

21 偲ふらむ 妹が門見む

22 靡けこの山

24 石見のや 高角山（たかつのやま）の 木の間より 吾が振る袖を 妹見つらむか

26 笹の葉は み山もさやに さやげども 吾は妹思ふ 別れ来ぬれば

1 『古今和歌集』時代の名歌

2 ●小野小町

3 花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに
 4 うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき
 5 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ 夢と知りせば覚めざらましを
 6 色見えて移ろふものは世の中の人の心の花にぞ有りける

8 ●在原業平

9 ちはやぶる神代も聞かず竜田川 からくれなゐに水くくるとは
 10 世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
 11 から衣きつつなれにしつましあればはるばる来ぬるたびをしぞ思ふ
 12 白玉かなにぞと人の問ひし時露とこたへて消(け)なましものを
 13 名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと
 14 月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

16 ●和泉式部

17 物思へば沢の蛩もわが身よりあくがれ出づる魂(たま) かとぞ見る
 18 あらざらむこの世のほかの思ひ出に今ひとたびの逢ふこともがな
 19 暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山の端の月
 20 黒髪の乱れも知らずうち臥せばまづかきやりし人ぞ恋しき
 21 こえもせむこさずもあらむ逢坂の関もりならぬ人などがめそ

23 『新古今和歌集』時代の名歌

24 ●藤原定家

25 来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩(もしお)の身もこがれつつ
 26 見渡せば花もみちもなかりけり浦のとまやのあきの夕ぐれ
 27 駒とめて補うちはらふかげもなしさののわたりの雪の夕ぐれ

1 梅の花にほひを移す袖のうへに軒漏る月の影ぞあらそふ
 2 移り香の身にしむばかりちぎるとてあふぎの風のゆくへ尋ねむ
 3 あぢきなくつらき嵐のこゑも憂しなど夕ぐれに待ち習ひけむ
 4 年も経ぬいのるちぎりははつせ山尾上のかねのよその夕ぐれ
 5 氷ゐるみるめなきさのたぐひかはうへおく袖のしたのささ浪
 6 消え侘びぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしのもりの下露
 7 春の夜の夢のうきはしとだえして嶺に別るよこぐものそら
 8 大空はうめのにほひに霞みつつくもりもはてぬ春の夜の月
 9

10 ●顯昭

11 なぐさめし月にも果ては音ねをぞ泣く恋やむなしき空にみつらむ
 12 ※我が恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行方もなし（古今集…よみ人知らず）
 13 ※あはれてふことだになくはなにをかは恋の乱れのつかねをにせむ（古今集…よみ人知らず）
 14

15 ●西行

16 願はくは花の下にて 春死なむ そのきさらぎの望月のころ
 17 心なき身にもあはれは知られけりしぎ立つ沢の秋の夕暮れ
 18 吉野山梢の花を見し日より心は身にも添わずなりにき
 19 吉野山こそ枝折りの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ
 20 道の辺に清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ
 21

22 ●後鳥羽上皇

23 み吉野の高嶺（たかね）のさくら散りにけり嵐もしろき春の明けぼの
 24

25
26
27
28
29
30
31

大祓詞 年二回、六月三十日（夏越の大祓）と十二月三十一日（年越の大祓）

1 たかまのはら

かむつま

ま

すめらがむつかむろぎ

かむろみ

みことも

2 高天原に神留り坐す

皇親神漏岐

神漏美の命以ち

3 て

やほよろづのかみたち

かむつど

つど

たま

かむはか

はか

たま

て 八百萬神等を神集へに集へ賜ひ

神議りに議り賜

4 ひて

我が皇御孫命は

豊葦原水穗國を

安國と平けく

ひて 我が皇御孫命は 豊葦原水穗國を 安國と平けく

5 知ろし食せと

事依さし奉りき

此く依さし奉りし國中に

荒

荒

知ろし食せと 事依さし奉りき 此く依さし奉りし國中に 荒

6 振る神等をば

神問はしに問はし賜ひ

神掃ひに掃ひ賜ひて

神掃ひに掃ひ賜ひて

神掃ひに掃ひ賜ひて

神掃ひに掃ひ賜ひて

神掃ひに掃ひ賜ひて

神掃ひに掃ひ賜ひて

振る神等をば 神問はしに問はし賜ひ 神掃ひに掃ひ賜ひて

7 語問ひし磐根

樹根立

草の片葉をも語止めて

天の磐座放ち

天の磐座放ち

語問ひし磐根 樹根立 草の片葉をも語止めて 天の磐座放ち

8 天の八重雲を

伊頭の千別きに千別きて

天降し依さし奉りき

天降し依さし奉りき

天降し依さし奉りき

天降し依さし奉りき

天降し依さし奉りき

天降し依さし奉りき

天の八重雲を 伊頭の千別きに千別きて 天降し依さし奉りき

9 此く依さし奉りし四方の國中と

大倭日高見國を安國と定め

大倭日高見國を安國と定め

大倭日高見國を安國と定め

大倭日高見國を安國と定め

此く依さし奉りし四方の國中と 大倭日高見國を安國と定め

10 奉りて

下つ磐根に宮柱太敷き立て

高天原に千木高知りて

高天原に千木高知りて

高天原に千木高知りて

高天原に千木高知りて

高天原に千木高知りて

高天原に千木高知りて

奉りて 下つ磐根に宮柱太敷き立て 高天原に千木高知りて

11 皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて

天の御蔭

日の御蔭と隠り

日の御蔭と隠り

日の御蔭と隠り

日の御蔭と隠り

日の御蔭と隠り

日の御蔭と隠り

皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて 天の御蔭 日の御蔭と隠り

12 坐して

安國と平けく知ろし食さむ國中に成り出でむ

天の

天の

天の

天の

天の

天の

坐して 安國と平けく知ろし食さむ國中に成り出でむ 天の

13 益人等が

過ち犯しけむ種種の罪事は

天つ罪

天つ罪

天つ罪

天つ罪

天つ罪

天つ罪

益人等が 過ち犯しけむ種種の罪事は 天つ罪 國つ罪

14 許許太久の罪出でむ

此く出でば

天つ宮事以ちて

天つ金木

天つ金木

天つ金木

天つ金木

天つ金木

許許太久の罪出でむ 此く出でば 天つ宮事以ちて 天つ金木

15 を本打ち切り

末打ち斷ちて

千座の置座に置き足らはして

千座の置座に置き足らはして

千座の置座に置き足らはして

千座の置座に置き足らはして

千座の置座に置き足らはして

千座の置座に置き足らはして

を本打ち切り 末打ち斷ちて 千座の置座に置き足らはして

16 天つ菅麻を本刈り斷ち

末刈り切りて

八針に取り辟きて

天

天

天

天

天

天つ菅麻を本刈り斷ち 末刈り切りて 八針に取り辟きて 天

17 つ祝詞の太祝詞事を宣れ。

此く宣らば

天つ神は天の磐門を押

天つ神は天の磐門を押

天つ神は天の磐門を押

天つ神は天の磐門を押

天つ神は天の磐門を押

天つ神は天の磐門を押

つ祝詞の太祝詞事を宣れ。 此く宣らば 天つ神は天の磐門を押

17

- 1 し披ひらきて 天あめの八重雲やへぐもを伊頭いつの千別ちわきに千別ちわきて 聞きこし食めさ
- 2 む 國くにつ神かみは高山たかやまの末すゑ 短山ひきやまの末すゑに上のぼり坐まして 高山たかやまの伊褒理いほり
- 3 短山ひきやまの伊褒理いほりを搔かき別わけて聞きこし食めさむ 此かく聞きこし食めしてば
- 4 罪つみと云いふ罪つみは在あらじと 科戸しなどの風かぜの天あめの八重雲やへぐもを吹ふき放はなつ事ことの
- 5 如ごとく 朝あしたの御霧みぎり 夕ゆふへの御霧みぎりを 朝風あさかぜ 夕風ゆふかぜの吹ふき拂はらふ事ことの如ごと
- 6 く 大津邊おほつべに居をる大船おほふねを 舳解へとき放はなち 艫解ともとき放はなちて 大海原おほうなばら
- 7 に押おし放はなつ事ことの如ごとく 彼方をちかたの繁木しげきが本もとを 焼鎌やきがまの敏鎌とがまも以もちて
- 8 打ち掃うふ事はらの如ごとく 遺のこる罪つみは在あらじと 祓はらへ給たまひ清きよめ給たまふ事ことを
- 9 高山たかやまの末すゑ 短山ひきやまの末すゑより 佐久那太理さくなだりに落おち多岐たぎつ 速川はやかはの瀬せ
- 10 に坐ます瀬織津比賣せおりつひめと云いふ神かみ 大海原おほうなばらに持もち出いでなむ 此かく持もち
- 11 出いで往いなば 荒潮あらしほの潮しほの八百道やほぢの八潮道やしほぢの潮しほの八百會やほあひに坐ます
- 12 速開都比賣はやあきつひめと云いふ神かみ 持もち加加吞かかのみてむ 此かく加加吞かかのみてば
- 13 氣吹戸いぶきどに坐ます氣吹戸主いぶきどぬしと云いふ神かみ 根國ねのくに 底國そのくにに氣吹いぶき放はなちて
- 14 む 此かく氣吹いぶき放はなちてば 根國ねのくに 底國そのくにに坐ます速佐須良比賣はやさすらひめと
- 15 云いふ神かみ 持もち佐須良さすらひ失うしなひてむ 此かく佐須良さすらひ失うしなひてば 罪つみ
- 16 と云いふ罪つみは在あらじと 祓はらへ給たまひ清きよめ給たまふ事ことを 天あまつ神かみ 國くにつ神かみ
- 17 八百萬やほよろづのかみたちとも 神等共きめまをに 聞きこし食めせと白まをす

『旧約聖書：創世記』より

בְּרֵאשִׁית, בָּרָא אֱלֹהִים, אֶת הַשָּׁמַיִם, וְאֶת

<u>הַאֲרֶצַּח</u>	<u>הָאֵימֹת</u>	<u>הַשְּׁמַיִם</u>	<u>אֶת</u>	<u>הַשָּׁמַיִם</u>	<u>וְאֶת</u>	<u>הָאֲרֶצַּח</u>
地	天	神	創造した	最初に		

וְהָאֲרֶצַּח, תְּהִי תָהוֹ וְכָהוֹ,

<u>וְהָאֲרֶצַּח</u>	<u>תְּהִי</u>	<u>תָהוֹ</u>	<u>וְכָהוֹ</u>
地	無形	空虛	そして

וְחֹשֶׁךְ, עַל-פְּנֵי תְהוֹם;

<u>וְהָאֲרֶצַּח</u>	<u>תְּהִי</u>	<u>תָהוֹ</u>	<u>וְכָהוֹ</u>
地	無形	空虛	そして

וְהָיָה אֱלֹהִים, מְרַקְּפָה עַל-פְּנֵי הַמָּיִם.

<u>וְהָיָה</u>	<u>אֱלֹהִים</u>	<u>מְרַקְּפָה</u>	<u>עַל-פְּנֵי</u>	<u>הַמָּיִם</u>
神	動いていた	水	～の上に	

וַיֵּאמֶר אֱלֹהִים, יְהִי אֹר;

<u>וַיֵּאמֶר</u>	<u>אֱלֹהִים</u>	<u>יְהִי</u>	<u>אֹר</u>
言った	神	あれ	光

וַיְהִי-אֹר;

<u>וַיְהִי-אֹר</u>	<u>אֵל</u>
あつた	光

וַיֵּבֶר אֱלֹהִים אֶת-הָאֹר, כִּי-טוֹב;

<u>וַיֵּבֶר</u>	<u>אֱלֹהִים</u>	<u>אֶת-הָאֹר</u>	<u>כִּי-טוֹב</u>
見た	神	光	よし

וַיַּבְדֵּל אֱלֹהִים, בֵּין הָאֹר וּבֵין הַחֹשֶׁךְ

<u>וַיַּבְדֵּל</u>	<u>אֱלֹהִים</u>	<u>בֵּין הָאֹר</u>	<u>וּבֵין הַחֹשֶׁךְ</u>
分けた	神	光の間	闇との間

וַיְהִי עוֹלָם (אֱלֹהִים, אֶת-הָאֹר, וְאֶת-הָאֲרֶצַּח)